

■ 研修会「草木塔巡り」のご案内

今年度の史談会研修会は「草木塔巡り」ということを行います。他の地域にはあまりないので、置賜地区特有の石塔といえます。どのようなものなのか、山形大学講師（当時）の土橋陸夫先生がわかりやすく説明した文章がありますので、示しておきます。

草木塔（そうもくとう）とは、「草木塔」、「草木供養塔」、「草木供養経」「山川草木悉皆成仏」などという碑文が刻まれている塔です。素材は石で、部分的に研磨するなどの手を加えたものもありますが、ほとんどが採石された状態のままの自然石です。国内に160基以上の存在が確認されていますが、建立されている地域は本州の一部に限局しております。さらに草木塔の約9割は山形県内に分布し、4つの地方に分かれる山形県内でも、特に、置賜地方と呼ばれる地域に集中して存在する石造文化遺産です。

最も古い草木塔は、江戸時代中期の安永9年（1780）に山形県米沢市入田沢字塩地平に建立されたものです。現在のところ、江戸時代に建立された草木塔としては、34基



最も古い塩地平の草木塔（安永9年）

が確認されておりますが、そのうち32基が山形県内に立てられています。山形県外の江戸期の草木塔は、安政6年（1859）の福島県耶麻郡熱塩加納村（現在は喜多方市）と文久3年（1863）の岩手県和賀郡沢内村（現在は西和賀町）の2例だけです。

（「ご覧いただく前に」『草木塔』  
2007 山形大学出版会）

研修会の詳しい日程などを次に記します。会

員以外の方も、ぜひお誘いください。

○いつ 10月5日（土）で、午前8時30分中央公民館前集合、バスで移動して午後4時過ぎに帰る予定です。

○参加費 2,000円

○定員 25名

○行き先 日本最古の米沢市入田沢の塩地平の草木供養塔ほか、米沢市の草木供養塔を巡ります。

○申し込み・問い合わせ 9月30日まで、教育委員会文化振興係 佐藤・竹田へ

☎85-6146

■ 「草木塔巡り」にあたって

齋藤幸村

石造文化財の調査のたびごとに『日本石仏図典』（日本石仏協会編 昭和61年）に頼ってきた。この本には石仏に関するほとんどの事項が掲載されており、便利さにかけては右に出るものなしと思っていた。ところが、「草木塔」については、この本には一言半句も出てこない。

それもそのはず、草木塔が調査され、様々な情報が収集されるようになったのは約60年前。正確には1949（昭和24）年、トラック運転手の藤巻光司氏が米沢市入田沢の白夫平で出会った草木供養塔に魅せられ、以後、山形県内はもとより、東京、京都方面まで足をのばし、草木塔を調査し、情報の収集を行ってきた。

その後、県内の有識者による研究が行われるようになったのだから、草木塔に関わる研究は四半世紀にすぎないといえよう。

このような時期に、「草木塔巡り」を行うことは、草木塔発祥の地、米沢市塩地平の草木供養塔をはじめ、数々の草木塔をとおして、地域の人々が先人の願いをどう汲みとり、子孫にどう伝えようと努力しているかを知るよい機会といえよう。

それにしても、わが町には草木塔はいくつあるのだろう。その現状を知ることからはじめよう。

白鷹町の草木塔

1 草木供養塔 1891（明治24）年

十王小四王 五十峯準一氏宅

正面右側 元山五十峯惣吉

屋敷入口の松の根元にある。惣吉氏は上杉家に払い下げられた御林の伐採に当たって、杉の大木の樹霊を感じ、作業後に供養塔を建立したと伝えられている。

2 草木塔 1989（昭和64）年

畔藤上杉沢 中嶋和由氏宅前

表面左側 十代弥左衛門

十代は長男として弥左衛門を襲名。戦時中は仏壇仏具も供出。山林の雑木は定期バスの燃料として供出。学徒動員から帰郷したときは荒廃した山林が残されていた。植林はしたものの林業から酪農に転じ、牧草地に転用する。草木の恵みに感謝の念から、自宅前、氏神子育て地蔵尊隣に建立した。

3 草木供養塔 1990（平成2）年  
十王権次平

沼の辺にフィールドアスレチック等の野外公園を造るために多くの樹木を伐採。その草木の供養として地域住民が建立。

4 草木塔 1998（平成10）年  
十王 今野正明氏宅

5 草木塔 2001（平成13）年  
深山 和紙センター

以上、5基建立されているが、この他『山形県の草木塔』（編集発行 船橋順一 平成2年）

には、下記の2基が掲載されている。

1 材木供養塔 1810（文化7）年  
深山大字橋本 白田重郎氏の地蔵堂北隣  
右側に 文化七年天願主  
左側に 9月吉祥日 弥五郎

2 財木供養塔 1866（慶応2）年  
深山大字橋本 樋口氏の畑中  
右側に 慶応二寅十月  
左側に 樋口金右エ門

ところが、この2基はともに『草木塔』（山形大学出版会 2007. 8）から除外されている。

このことについては、守谷英一さんが『草木塔』Vol13』（やまがた草木塔ネットワーク 2011. 1）で除外されていることへの異論を述べておられるので、機会があれば詳しくお聞きしたいと思う。

（守谷付記 私は江戸期までの草木塔とこの材木供養塔、財木供養塔は、おそらく、修験道との関わり、生業との関わりなどの建てられた経緯については共通するものがあると考えている。詳細は齋藤幸村さんが紹介している拙論を御覧いただきたい。）

## ■ アイコ・アカソ・アオソのことなど 丸川二男

会報の30号に守谷さんが布に関わる植物のことを書いていたが、それを読んだ人から「アイコとアカソは同じものか?」と聞かれた。この種のものに疎い私は「調べてみる」とだけ返事をしたが、さて内心おだやかではない。

手元の安物の事典などは役に立たず、まずは

現物にあたるべしと、山口と西高玉にいる山のことにくわしい古老を訪ねた。話はすぐに通じた。そして家の脇に自生しているアオソと、育てているアイコの畑に案内してくれた。すぐ側のやぶにはアカソもあり、このあたりでは「アカダ」と言うことも教えてくれた。植物としては全体の色や茎からの葉の出方、形、など、要所を見比べればはっきり区別ができるものだった。

また常福院の平田さんは、ハスの茎から取った糸で織ったという布を見せてくれたほかに、隣の朝日町に安部さんという人が「あかだ織り」をやっていると教えてくれた。今となればすべてが邪魔になってしまった雑草である。古老曰く。「名前が違えば物は違う」という。後で牧野富太郎の図鑑などでみると、その通りだった。



上の写真は左からアオソ、アカソ、ミヤマイラクサ（アイコ）である。アオソは葉の裏が白く、アカソは茎と葉柄が赤く、葉の先が三つに分かれる。アイコは小さなトゲがあり、素手でさわったりすると痛痒くなる。葉の裏は緑色である。

とどのつまりは、日ごろ私たちの使っている言葉が実物から離れてしまっているということに尽きるように思う。春に山菜として食べるアイコが「ミヤマイラクサ」という名前を持ち、かつて茎から糸をとって布に織ったことが、もう遠い昔の話になってしまったせいもある。同じことはアカソ・アオソにもいえることで、アオソだけが「青苧」と書かれて藩に納めなければならなかったとか、いろいろな資料や歴史の文献に出てくるから言葉だけを知っているにすぎないせいだろう。

これらだけでなく、ふだんから身近なところにある植物に、もっと関心を持つ必要があることを痛感させられた一件であった。

## ■ 布に関わる様々な植物のこと（2） 守谷英一

前号で、不用意に「山菜のアイコとしてなじ

みのアカソ」など書いたばかりに、丸川さんに迷惑をかけてしまった。

アオソ、アカソ、アイコは丸川さんが調べてくださったように、イラクサ科の植物であるが、それぞれ違った種類の植物である。改めて訂正いたします。

しかし、そのどれもがそれぞれに地域で繊維を採集し、布を織っていた植物である。奥村幸雄先生が書いた『山野草の民俗』（1996）には、アイコの繊維採集についておもしろいことが書いてあった。「繊維採集するためのアイコ剥ぎの時期は、十月末ごろからである。小国郷には、アイコ・アカダは初節句（旧九月九日）まで取ってはいけないと言い伝えている。春の食用としてのアイコでなく、秋の繊維採集のアイコ剥ぎに対する規制であるが、規制の要がある程、採集されたのであろう」。

このほか、奥村先生の本には、アカダ（アカソ）の繊維も同様に使用されたし、それも江戸時代から続いていたものだったことが記載されているし、そのほか、ゼンマイの綿毛も紡いで糸にして織っていたことも記載されている。

東北芸術工科大学教授で、新潟県三面のマガギ文化の研究者である田口洋美氏の著作（『越後三面山人記』）によると、ゼンマイの採取が戦争のように行われるようになったのは、大正2（1913）年ごろだという。乾燥したゼンマイが、貿易船船員の保存食として注目されたとか、海軍の兵員用食材に採用されたため高値で取引されるようになったためだといわれている。

それ以降、現在までゼンマイという植物は繊維を利用する植物から、食品植物へ姿を変えていったのである。アイコについても似たようなことがあるのかもしれない。

アオソについては、前号に「白鷹町十王は、かつて直江兼続が青苧栽培に適した土地であるからといい、米沢藩領で栽培を奨励した最初の土地であった。そして、米沢藩の青苧は小千谷縮の原料として、越後に運ばれ、藩の財政を支えた。」と書いた。しかし、現在のアオソは、この地区では道ばたや土手や、耕作放棄地などのあちらこちらに繁茂し、草刈りの大変な、迷惑な雑草になってしまっている。似たような状況だったのは桑である。現在は白鷹町でも桑畑が余り見られなくなってしまったが、少し前までは養蚕をやめてしまったために、手入れされないまま放置された桑の木が見られた。そして、アメリカシロヒトリの格好の繁殖地になっていた。一つの産業が下火になると、それに利用されていた植物は邪魔者になってしまう。人間の勝手さと感じられることでもある。

けれども、そういうものがうまく利用できる

いものか。インターネットでちょっと調べたら、桑は「マルベリー」という名前ですべて紹介されていた。痛みやすいので生食するのは栽培している人の特権で、ジャムなどに加工するらしいが、鉄やカリウム、アントシアニンなどを含んでいて、生活習慣病の予防に効くという。

子どものころ唇を紫にして食べていたものと同じかどうかはわからないが、農協あたりで桑畑の転換を計るときに食品植物というようなことを考えたりはしなかったのだろうか、と余計なことを思ったりしている。

## ■ 山口の十二の桜について（その1）

江口儀雄

（前号でお知らせした「十二の桜シンポジウム」でお話しなされた内容を書いてもらいました。次回と分けて掲載します。）

九州鹿児島では3月15日頃に桜が開花し、桜前線は北上していく。東京は3月20日、そして白鷹は4月下旬から5月初旬。北海道稚内は5月25日頃で桜は70日かけて日本を桜色に染めるのである。

櫻の作りの「嬰」は、あかご、みどりご、わかひ、いとけない、めぐる等の意味がある。「嬰兒」「嬰孩（えいがい）」は生まれたばかりの幼児、乳のみ子、あかご、である。「孩」はあかごが初めて笑うさま、である。

世界遺産になった富士山は、山そのものがご神体として信仰されてきた。静岡県富士宮市にある富士山本宮浅間大社は、浅間大神と称される木花咲耶姫を祭神としている。

浅間大社の由緒には、第七代孝霊天皇のころ、富士山の噴火により人々が恐れて逃げ出したことから国が荒れ果て、後に、第11代垂仁天皇が木花咲耶姫を富士山の麓に祀って山霊を鎮めたのが起源とされている。

その桜の美しさを体現しているのが木花咲耶姫であり、「木の花」が美しく「咲く」というのは、ものごとの繁栄を象徴している。

天照大神は日本の国を治めさせるため、自分の孫の瓊々杵命（ににぎのみこと）三種の神器である八尺やさかの勾玉・鏡・草なぎの剣を持たせ降臨させることになった。天兒屋命（あめのこやねのみこと）や手力男神（たちからのかみ）などの神々が瓊々杵命に付き従った。

瓊々杵命一行が天から降りようとしているとき、地に通じる要所で輝きを放つ神の姿があった。天鈿女神（あめのうずめのかみ）が近づいて「誰か」と問うと、国つ神の猿田彦神で、先導役として仕えたいという。一行はこれを認め、

猿田彦神を先頭にして、天の浮橋から筑紫・日向の高千穂の霊峰に降り立った。

ある日、瓊々杵命は、海岸で美しい木花咲耶姫に出会った。瓊々杵命はたちどころに咲耶姫に恋をして結婚を申し込んだが、一存では答えられないので父に話すように頼んだ。そこで、さっそく大山祇命に求婚の意志を伝えると、大山祇命はたいそう喜び、盛りだくさんの引出物を添えて、咲耶姫と長女の石長姫（いわながひめ）をいっしょに嫁がせた。

瓊々杵命は器量の悪い石長姫を気にいらなかったため送り返したが、大山祇命は石長姫を嫁がせたことについて、瓊々杵命の命が風雪に耐える岩のように安泰であることを願ってのことだったと言い、咲耶姫だけをとどめるなら木の花が咲きそろうほどの短い命となるだろうと残念がった。

木花咲耶姫は瓊々杵命と一夜寝床を共にして、夫婦の契りを結んだ。咲耶姫はめでたく身ごもったことを瓊々杵命に告げると、瓊々杵命は、たった一夜の契りで身ごもったことに不信をいだき、自分の子ではなく誰か国つ神の子ではないかと責めた。

これに対して、咲耶姫は、自分の身ごもった子が国つ神の子なら出産のときによくないことが起こり、もし、瓊々杵命の子なら無事に出産できるだろうと言い残し、隙間をすべて壁土で塞いだ部屋に入り出産の準備をした。咲耶姫は産気づいたところで室に火を放ち、炎の中で無事に三柱を産み落とし貞操を証した。神々は生まれた順に、火照命（ほでののみこと）（海幸彦）、火闌降命（ほすせりののみこと）、彦火々出見命（ひこほほでののみこと）（山幸彦）と命名された。

荒砥の八幡神社の桜、鮎貝赤坂の桜、山口の十二の桜は「種蒔き桜」と呼ばれ、桜の花が咲いた時が苗代に稲を蒔く好期とされた。雪に閉ざされた長い冬から解き放され、桜の花は農事の始まりを知らせるものであった。桜の「さ」は、五月、早苗、早乙女、さなぶりなどの「さ」であり、穀霊を表わすという。「くら」は座であり、神が座る所で、神が降臨する場所である。桜の花の咲き方でその年の稲の作柄を占い、豊作を念じたものであった。

また、死者を葬ると、土を盛って塚を造った。そのままにして置くとわからなくなるので、目標（めじるし）に桜の木を植えた。人の手によって植えられたと考えると、墓の可能性もある。大きく成長した満開の桜に神々しさを感じ、種蒔き桜としての信仰に繋がっていった。

農民の間では、山の神は旧暦2月17日に山を降りて田の神となり、田の守護神となる。旧暦10月17日に再び山に戻ると考えられている。山

の神と田の神が交代するところでは、山の神は木花咲耶姫で女神である。山仕事で生活を維持している地方では交代説は見られない。猟師、木樵、炭焼きなどの山民にとっての山の神は、自分たちの仕事の場である山を守護する神である。山の神は大山祇命となっている。

この山の神は一年に12人の子を産むとされるなど、非常に生殖能力の強い神とされる。山民の山の神は禁忌に厳しいとされ、例えば祭の日（一般に12月12日、1月12日）は山の神が木の数を数えるとして、山に入ることが禁止されており、この日に山に入ると木の下敷きになって死んでしまうと言われる。十二山の神、十二や様と呼ばれているのは新潟県から置賜地方の小国地方の特色とも言える。

（次号へ）

## ■ お知らせ

○「白鷹丘陵の歴史と文化・フォーラム」の案内

平成25年11月9日（土）に荒砥地区公民館で上記のフォーラムが開催されます。今回は、本会も協力して白鷹町で開催することになりました。メインテーマは「白鷹丘陵周辺の古墳（仮題）」ということです。白鷹町には古墳はないものだと思っていましたが、廻り屋遺跡からは「方形周溝墓」というものが発掘されているそうです。このフォーラムは「山辺町郷土史研究会」「上山郷土史研究会」「本沢郷土研究会」「中山町郷土史研究会」「西山形郷土史研究会」「朝日郷土史研究会」「村山民俗学会」「山形市郷土史研究会」が参加している会です。当日はそれぞれの会の方々の研究発表も行われます。また、交流会も予定されているようです。会員の皆さんのご協力と御参加をお願いします。

期日 11月9日（土）

午前9時受付開始 9時30分開会

午後の部午後1時開会

会場 荒砥地区公民館

参加費 500円（昼食代等別）

参加申込み・問い合わせ 江口儀雄

080-1801-5367

○平田孫蔵『あの人 この人』の出版

本会会長の丸川二男さんが編集し、出版なさいました。

平田孫蔵は昭和31（1956）年から昭和46（1971）年まで「長井新聞」を発行した人です。この書籍は「長井新聞」に連載されていた長井市内の人物探訪記をまとめたものです。1冊1,500円で、300部発行されています。ご希望の方は丸川さんまで、

0238-85-3440